http://grimreaper.is-mine.net/

ヴァルハラ・ヴァルフレア

著：えむ

http://grimreaper.is-mine.net/

四、火焔

甲高い金属音が蒼穹に鳴り響いた。
叩き付けられた剣戟は、重い。受け止めた瞬間、足が地に沈み、殺し切れない衝撃が腕を伝って身体を直下していった。
はからずとも、受け止めた無銘の大剣が破断しなかった事に疑念を抱いてしまう程の強烈な一撃。もしもあと刹那でも見切りが遅れていたら、双眸に宿った光は失われていただろう。
およそ女が振るう力ではない。
つい数分前まで兵士でありそして奴隷であった男は、交えた剣の先にいる鎧纏いの女を睨みつけながら改めて彼女たちが振るう膂力を呪った。

戦乙女（ヴァルキリー）。

眉目秀麗。明眸皓歯（めいぼうこうし）。
輝く麗髪をなびかせ、瞳に碓氷を宿し、神の意志を以って戦場を駆る凄女。
そんな存在に対し、たかが人間ごときが、人間だった者ごときが立ち向かうなど〈この地〉に存在するどんな歴史書にも預言書にも書かれていない事だろう。
戦乙女は鍛え上げられた屈強な戦士だ。
だが、
それが男にとって尻込みをする理由にはならない。
もはや人間という括りから大きく外れた者となった男は、男たちは、〈この地〉において誰よりも自由で何ものにも縛られず、そして比類なき存在だ。
割れる地を踏みしめ、上から覆い被さってくる圧力を押し返しながら、男は共に幽閉されていた仲間の名を叫んだ。
「行け！　ロビン!!」
直後、男の横を銀髪の少年が駆け抜けた。
それを見た戦乙女が叩き付けた剣を浮かせ、少年を追いかけようと地面を強く蹴り出した――――のだが、大剣の男に瞬時に回り込まれ道を阻まれた。
凛とした彼女の表情が僅かに歪む。歪むといっても片眉が動く程度ではあるが。

http://grimreaper.is-mine.net/

しかしそれでも何か言いた気である事はおよそ読み取れる。
「不満でも？」
促すが彼女は何も答えなかった。
否、それが正しい。
無言である事が答。瞳の奥底に青い焔をたぎらせているのを見れば、言わずもがな彼女の精神が不満に、あるいは怒りに満ちているのが分かる。
――それ程までに解せんか。〈この地〉に異端が存在する事が。
そんなものは自業自得だと男は笑う。
因果応報だと鼻で笑い飛ばす。
男は身の丈もある武骨な大剣を片手で持ち上げ、切っ先を真正面に向けながら、戦乙女を見据えて吐き捨てた。
「今日を以って己れたちは、ヴァル ハラを降りる」

幾つもの爆音がしたと思ったらその直後には鉄球の雨が降り注いでいた。
着弾と同時に巻き起こる爆風と爆炎に巻き込まれ、幾人もの男たちが悲鳴をあげる間もなく吹き飛ばされた。
そんな硝煙弾雨の中を、少年ロビンは駆け抜ける。
銀の髪が跳ね、服の上から被った銀色の胸当てとレガース、腕甲が赤い閃光を反射する。
ロビンが見据えるは鉄球の砲台が並んだその更に先。数百もの戦乙女たちが構える戦場の中心だ。
ロビンは迫る鉄球を回避し続けながら思った。
身体が軽い。視野角が広い。
鉄球の弾道が手に取る様に分かる。踏込みの一歩一歩に力がみなぎる。
風を切る、という感覚が実感できていた。
この戦場を生き抜く力。活路の存在というものを感じ取っていた。
しかし、分からない。
これだけ五感は良好であるのに、しかしてハッキリとしない事がある。
――僕は、生きているのだろうか。
自分は一度死んでいる。
にも係らず、呼吸は正常だ。心臓も動いている。腹も減れば眠くもなる。
自己が持っている人間としての最後の記憶は既に停止しているはずなのに、

http://grimreaper.is-mine.net/

〈この地〉で目覚めた後も愚鈍な脳髄は相変わらず煩悩で満たされている。
この事についてロビンは、先ほど後方に置き去りにして来てしまった大剣の男アルヴィンスに問うた事があったのだが、その返答はやはりハッキリとしないものだった。
答えられなかった事をアルヴィンスは謝罪してきたが、恐らく、彼自身も自分が置かれている状況を全て把握できている訳ではないのだろうとロビンは推測する。
では、仮に自分が生きているとして、二度目の生を受けた理由は何かと問われれば、思い当たる事が一つだけある。
それも例によって正誤は明確ではないが――
大量の火薬が一斉に炸裂する音が再び木霊し、先よりも数を増した弾雨が容赦なく降り注いだ。併せて、砲台の後方で構えていた戦乙女の軍勢が、戦場に散らばる男たちをすれ違いざまに切り伏せてこちらに突撃してきている。
ロビンと軍勢の距離が無くなるのに時間は掛からなかった。
まず先頭を駆けていた騎兵三機が接近。それぞれ好機を計って長槍を振り抜くが、ロビンは身を翻して回避。騎乗した者たちを蹴り飛ばして着地する。
その刹那、乾いた雷鳴が耳をつんざいた。
反射的に音がした方向に視線を走らせると、雷光が頬を掠めていくのが辛うじて視認できた。微弱な痺れを感じたが致命傷には程遠い。
そうしている間に間合いを詰めていた歩兵二七人がロビンを取り囲む。
逃げ場はない。回避する隙も暇も。斬撃を受け止め、流す武器すらロビンは持ち合わせていない。
ぽたり、と。
不意に、頬の傷から滴った血がガントレットに落ちた。
銀に落ちた一滴の赤から燃え上がる様な温度が伝わってくる。腕甲に付着したそれは発火して小さな火種となり、瞬時に灼熱――炎上。一気に拳を覆い尽くした。
戦乙女たちが振り上げる刃の煌めきが視界の隅に映ったがロビンはそれには一切目もくれず、地面に向かって力任せに拳を振り抜く。
次の瞬間、ドン、という衝撃音が周囲に響くと同時、叩き付けた拳を中心に焔が広がった。
火焔を伴った衝撃の波紋は数メートル圏内にいた者たちをまとめて吹き飛ばし、大地もろとも焼き尽くさんと猛る。

http://grimreaper.is-mine.net/

ロビンは口角を上げ、邪悪に笑った。
眼窩におさまった碧眼はやはり前方を見据えている。
そこいら中に転がった女たちなど初めから眼中にない。
ロビンが見据えていたのは、戦場の中心からこちらを見返している人物。自分と同じ銀色の髪を持つ女ただ一人だけだった。
視線から殺意が伝わってくる。静かな闘志が大気を震わせているのが分かる。
彼女が放つそれらは、焼野原と化した大地に横たわる者たちの比ではない。
遠方、彼女がもらす言葉が耳に届く。
「――退くと言うのなら赦す事もやぶさかではないぞ、従僕」
それに対するロビンの返答は、無言だった。
彼女が動かずにいたのはかつての僕（しもべ）に対するせめてもの情けだったのか。
まるで悪戯をしてしまった子を叱る親のように腕を組んで立ち尽くしていたのだが、再び駆け出すロビンを見て、ため息交じりに小さく呟いた。
「宜しい。ならば戦争だ」

http://grimreaper.is-mine.net/

一、ロビン・ウォルタナの後悔

重く閉ざされた黒の部屋の外では、火薬が爆発する音と乾いた雷鳴が轟いていた。
主を失った部屋の中は石造りで狭く、天井の小さな穴から差し込む僅かな光が室内を辛うじて照らしていた。
壁が、床が、天井が、静かな黒光りを放つ。
そんな独房とでも言うべき空間の中心、石畳の上、天井の穴から差し込んだ光の下に、紐でつづられた紙の塊があった。
一枚一枚の紙を幾重にもしてまとめた物らしい。
紙の大きさはまばらで材質も異なり、書物の様に項を送ることが出来るのだが、開いたそばから崩れてしまいそうなほど造りは粗雑で、端々には血の様な赤黒い何かが付着していた。
不意に、その『不完全な本』の項がはらりとめくれた。天井の穴から爆風の余波が流れ込んできたようだ。
材質から見るに羊皮紙と思しきそれで作られたページには、こんな文字が刻まれていた。

――僕の一度目の最期と、二度目の記憶をここに記す――

◇・◇・◇

ロビンの日記より　一部抜粋

僕は死んだ。
比喩でも何でもなく、言葉そのまま意味そのまま。
心臓が活動を停止し、脳が思考を止め、血潮が錆びついた。
僕の場合、殺されたと言った方が正しいのだろうけど、どこをどう歪曲させても死したという事実は変わらない。絶命したという結果を変える事はできない。

http://grimreaper.is-mine.net/

できないはずなのに。
およそ不可能だと思っていたのに。
僕の心臓は鼓動を再開し、脳髄は思考を継続し、血は脈々と身体を巡っている。
……。
意味が分からない。僕の命は、あの雪山で確かに終わりを迎えたはずなのに。
目が覚めたら温かみのある木組みの天井が見え、身体を起すと周囲には大勢の人々の姿があって、立ち上がるとそこが酒場であるという事が分かった。
死の直後、酒場に召されるなどという話は聞いた事がないのだけど、これが噂に聞く死後の世界かとその時は思った。
僕は生前、執事のアルデバートや大臣のホプンに死後の事について聞いたことがある。
二人の話によると死というのは、『肉体の消滅。魂の解放。精神のみという本来の姿を取り戻し、天上に昇り、痛みも辛さもない至福の時を迎えるためのプロセス』なのだそうだ。
今思えば、それは妄想の類だったという事が分かる。
彼らは死んだ事がない。ゆえに事実を語る事はできない。
対して僕は死んだ事がある。ゆえに真実を語る事ができる。
死者である僕の見解からすると、死というのは……死と、いうのは……
……。
……。
よく分からない。
そもそも、生と死という概念自体がよく分からない。
生というのが、息をし、物を食べ、笑い、泣き、尊ぶものだとすれば、今の僕だって同じ事ができる。酸素が欲しいから呼吸をしているし、空腹からか腹の虫が鳴いている。この状況に辟易、混乱、思考するだけの精神もある。
何が違う？
死を迎え、なお生命活動を行っている僕は、一体どちらに該当する？
考えふけっていると、酒場の中心からどよめく声が聞こえてきた。
何があったのかと思い、そちらの方に目を向けると、鎧を身に纏った女性四、五人の姿が騒ぎの中心にあった。
彼女たちは言った。

http://grimreaper.is-mine.net/

「従僕ども、汚れた手で我らに触れるな」

直後。

鮮血が舞い、肢体が吹き飛び、それまで人の形を成していた者が物に変わる瞬間を僕は見た。

たびたび戦場に出兵していた僕には聞き覚えのある水気を含んだ鋭い残響。

彼女たちの手には今でこそ何も握られていないが、腰から下げた剣を掴み、刹那に抜刀する所作は並みの技術ではままならない。

耳の奥に残る斬撃音。

斬撃音というのは刃を振るう人間によって違うものだ。

僕はこの斬撃音を、どこかで聞いた覚えがある。

「こうなりたくなくば気安く触れぬ事だ。もっとも、お望みとあらば切り刻む事もやむなし」

女性の中の一人、僕と同じ銀髪の女と目が合い――瞬間、煮沸した感情が腹の底に湧き、一気に脳髄まで駆け上がってきた。

頭蓋が熱い。呼吸が乱れる。全身がざわめく。

この感情が『憤怒』だと判断するのに時間は掛からなかった。否、この怒りを忘れるわけがない。

何故ならあの銀髪の女は、僕が殺したいと願っている女だったのだから。

煮え滾る感情が捲し立てるように頭蓋まで押し寄せ、僕は、次の瞬間には女の懐に飛び込んでいた。人垣のバリケードを押し退け、女の名前を叫びながら。

しかし、振り上げた拳は届かない。

その場にいた女の仲間に取り押さえられ、地に伏せられたのだ。

そんな僕の姿を見て、銀髪の女はまるで興味がなさそうに鼻で笑い、捨て台詞を吐いて酒場から消えて行く。

「――ふん。宴は終わりだ。全員牢へ戻れ」

なす術もなく独房のような部屋にぶち込まれたのは、そのすぐ後だ。

◇・◇・◇

側頭部が痛い。

薄い布切れ一枚と台座があるだけの狭い部屋に投げ込まれた際、床や壁に頭

http://grimreaper.is-mine.net/

をぶつけてしまったらしい。
最初は重く閉ざされた扉を叩いて抗議を図っていたのだが、馬鹿らしくなって途中でやめた。
床に寝転んで何の気なしに天井を見ていると小さな穴を発見。その先には藍色の空とちかちか瞬く極小の光が見える。今が夜にあたる時間帯なのだと気付いたのはその時だった。
しかし先の騒動、
……人が、死んでいた。
ここが死後の世界であるならば、そこにいる人々はみな死んでいるわけで。
死んだ人間が更に死ぬというのは、何というか……。死の重複。そう、死の重複なんて有り得るのだろうか？
もしかするとここは死後の世界などではなく、現世のどこか知らない場所なのでは――

『――ここはあの世さ』

と、誰かの声に虚を突かれ、僕は思考を止めた。
『何をきょろきょろしている？　隣だ隣』
続けて聞こえてくる声に誘導されるように壁に耳を押し当てる。
しかし、分厚い壁からはひんやりとした感触しか伝わってこず、肉声なんて通りそうにもない。
『ああ、そのままで聞け。別に己れは、咽頭を使って声を発しているわけではないのでな。いやこれでは誤解を招く。咽頭を使わずとも喋る事ができる、と言った方が正確だ』
「……どういう事、ですか？」
思わず疑問を声に出してしまったが、この全てを遮断してしまいそうなくらい重圧な壁に向かって言っても相手に届くわけもなく。だが隣にいる人物は、
『構うな。お前の声はしっかりと聞こえている』
やはり意味不明な事をもらす。
『隣室に人が入るのは久しぶりだ。しかも己れの声を聞く事ができるか。長年独りで退屈していたところだ。少し話し相手になって欲しいのだが』
その申し出に対し、僕は深く考えず頷いて答えた。
声で応えて構わないと言われた事を思い出し、口を開こうとしたのだが、隣

http://grimreaper.is-mine.net/

室の人物はまるで僕の行動が視えているかのように――いや、語弊がある。視えているからこそ的確な指摘ができるのだろう。『普段通りでいい』と促し、低い声で僕に問うた。

『お前の最期は、どんな死様だった？』

◇・◇・◇

僕は死んだ。

比喩でも何でもなく。ただ事実として。

……あと少しだった。

ふざけた絵空事から救う事ができたはずなのに。

たった一人の肉親を守る事ができたはずなのに。

全ては、ブリュンヒルドと言う名の女の登場から狂い始めた。

彼女は言った。

戦乙女という自身の立場上、これより先に起こりうる『神々の黄昏』に勝利するためには女神の覚醒を促す必要がある。したがって、カサドレア国のニーナ姫の魂を拘束する。と――

言っている意味が理解できなかった。

『神々の黄昏』とは何なのか。

女神とは何なのか。

ただ、これだけは分かる。彼女は利己的な思想の下、ニーナ姫の命を奪おうとしているのだと。

そしてそれは、無情にも遂行された。

僕の目の前で。眼前で。目下。鮮血に塗れた。肢体。寸断。

それはもはや＊＊＊ではなく。　面影も香りも＊＊＊＊も消え失せ。

単なる＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊の＊で。

――認めない

http://grimreaper.is-mine.net/

聡明で綺麗だった＊＊＊とは別の。
――認めない
透き通るような＊は、もう永遠に。
――認めない

僕はブリュンヒルドが住まうという天空に一番近い山に登った。道は険しかった。だが、体中を駆け巡る憤怒が僕を駆り立てた。そして頂上に到達し、僕は彼女と相見えた。
対峙した瞬間、体中の血がざわつき、自分の身体が更に高熱を帯びていくのが分かった。
僕の姿を見、驚愕する彼女の表情が印象的だったが雌雄は一撃の下に決した。
雷光。
戦乙女ブリュンヒルドが扱う神速の槍が僕の心臓を穿ったのだ。
胸部を抉られた直後の記憶は曖昧だが、魂の奥底に灯った業炎は、消えはしない。

――殺してやる。

それが、僕が一度目の最期に放った言葉だ。
他の誰にでもなく、ニーナ姫を殺した張本人へ――たった一人の妹を殺害したブリュンヒルドへ向けて。
妹には確かに、生まれ持った不思議な力があった。
ニーナが歌えば動物たちはまるで仲間であるかのように寄り添い、負傷した者に手をかざせば瞬く間に傷が治癒していった。微笑めば誰しもが笑顔になったし、そばにいるだけで心が安らいでいった。
しかしニーナも人間だ。
国の政治に頭を悩ます事もあれば、戦死者の墓前で自分の不甲斐無さに打ちひしがれている事もあった。国を治める自分がもっとしっかりしていれば、と。
悔やまない日などなかった。人々の死を悼み、涙を流す心優しい奴だった。
なのに――
何故だ？　何故ニーナが殺されなければならない？　妹が何をした。一体なんの理由でこんな事になっている。
僕は、死してもなお猛り続ける灼熱の思いを仇敵に向け続けている。

http://grimreaper.is-mine.net/

http://grimreaper.is-mine.net/

二、アルヴィンス・ガザの導き

主人を失った白の部屋は、その潔白さを寂しく残響させる。
例え外界が戦場と化していようとも。死の匂いが立ち込める血みどろの世界になっていたとしても。
ぐらり、と。
一瞬、この白の部屋がある建物自体が揺れた。
砲弾でも当たったのだろうか。
割かし大きな揺れだったはずなのだが、白の部屋に変化はない。この分でいくと、隣接する黒の部屋もおそらくなんともないのだろう。
主人を失った白の部屋は、尚もその潔白さを残響させる。
まるで無実を証明するかのように。あるいは何かを塗りつぶそうとしているかのように。
部屋の片隅。
隣室に置かれた物と同じ台座の影に、何かが書かれている。
よく見ると、白い壁に走る赤い線は文字を紡いでいた。

――己れの叡智と使い古しの魂を、最期へと導く――

この部屋にはかつて、賢者と呼ばれる者がいた。

◇・◇・◇

アルヴィンスの呟き　徒然

隣室に誰かが入ってくるなど一体いつ振りか……。
しかもよりにもよって黒の部屋とは。
どうやら新顔は、よほど戦乙女たちに嫌悪されているらしい。まあ、黒の部屋に入れられる者は大概なにかしらのタガが外れているから、嫌悪されるのも仕方あるまい。

http://grimreaper.is-mine.net/

……しかし、

なんと荒々しい魂を持った者か。

銀色の髪に女のような顔。そんな端整な外見に似つかわしくない業炎を心中で炎上させている。

話を聞くに、復讐が目的であるらしい。

しかもあのブリュンヒルドを仇敵と見定めていて、己れはその場にいなかったのだが、というよりもここから動けなかったのだが、酒場ですでに一悶着起こした後のようだ。

ブリュンヒルド相手にかような事をしでかすなど、普通であればその場で首を飛ばされるところなのだが、奴がこの少年だか青年を殺さないでいるのは、恐らく素養があると看破したからなのだろう。

証拠に己れの『声』も届いている。

まあ、そうでもなければ黒の部屋に入れられる事もないのだろうが。

ただ正直なところ、己れも驚いている。

久方ぶりの隣人が、まさか男の身でありながら『戦乙女の力』を持つ者であろうとは。よもや己れと同じ体質を持ち合わせていようとは。

天の思し召しか。

いや、神だの天だのは信じていないが、ここぞとばかりにすがらせてもらう。

どうやら運が向いてきたらしい。

そして憐れ戦乙女たちよ。

恨むならお前たちの父が作り上げた法則を恨め。

◇・◇・◇

「……四大（フォルス）？」

気の抜けた声で己れの言葉を反芻するロビンの表情は間抜けだ。

無理もない。三日三晩も話し続けているのだ。しかも自分にそんな幻想染みた力が宿っているなんて、普通の人間は思わない。

思いの力――四大（フォルス）。

http://grimreaper.is-mine.net/

それが、戦乙女たちが振るう膂力の正体である。
火水風地。天界であるここヴァルハラを含む三千世界は、基本的にこの四大を基に形作られ、結束。縛られている。
そしてこの力は、己れたちにも宿っている。
本来四大は主神オーディンが子である戦乙女に与えるもの。しかし四大というのは世界を形作る要素。いわば、普遍的に自然的に、造作もなくその辺りに転がっているものでもあるのだ。
四大はその性質上、何かを核に収束する。
それは例えば古めかしい道具であったり、気の流れが溜まり易い場所であったりと形は様々だが、稀に、大きな感情を持った心に収束する場合がある。
怒り、悲しみ、憎しみ、喜び。
もしも戦乙女以外の者が四大を授かるとすれば、その一点。
だが、その条件を持ってしかも人間にとって死後の世界であるヴァルハラで二度目の生を受けるとなると、その人間の存在価値はもはや人以上のもの――もしくは人外と評しても間違えではない。
ヴァルハラで二度目の生を受けるには、通例、二つの条件を満たさなければならない。

一つ、帰天の過程で主神の加護を受けなければならない。

加護の授受。これは、きたる『神々の黄昏』に備えて集められた戦士たちを管理するための採番処理のようなものだ。加護というのも名ばかりで、実際には主神の四大の末端に触れさせる事で戦士たちを洗脳するためだけの作業である。

そしてもう一つ、戦乙女の手で死した者は蘇生の対象とする事ができない。

基本的に戦乙女たちは戦士の収集において自らが人間に手を下す事はできない。
ただし、主神の加護を受ける事ができない者（既に四大を保有している個体）は洗脳ができず、反乱分子と成りうるため、排除しても構わないという特例が存在する。
また、四大を保有すると判断された人間の魂は地獄（ヘルヘイム）に叩き落とされ、永劫囚

http://grimreaper.is-mine.net/

われの身となる。
事実、己れも一度は地獄に堕ちた身。
無論、ロビンも堕ちているはずなのだが一部記憶が抜けているらしい。
そんな己れたちが何故ヴァルハラに存在しているのか。
答は簡単だ。――ヴァルハラへ至る方法が他にもあるからである。
考えれば難しい事ではない。戦乙女たちが地上に降り、その後どのようにしてヴァルハラへ帰還しているのかという事を考察すれば。
「……アルヴィンスは、なぜヴァルハラに？」
現状を説明している途中、ロビンは唐突に己れに尋ねてきた。
『探しものだ』
「探し、もの……？」
そしてそれは、
『ロビン、お前ができることならば取り戻したいと願っているものと一致する』
「……どういう」

『ロビン。お前まさか、妹御が死んだとでも思っているのか？』

「……!?」
『考えてみろ。戦乙女は自ら人間に手を下す事はできない。ただ、魂の拘束は可能なんだよ。己れたちがいい例だ。お前は覚えていないだろうが、己れたちは一度地獄に堕ちている。そしてブリュンヒルドは「女神であるニーナ姫の覚醒を促す」と言ったらしいな』
「だけど僕はこの目で！」
『――四肢を切断されるのを見た、と。血しぶきを見た、と。だから死んだと？』
では、
『己れたちは一体なんだ？　心臓は動いている。腹も減れば眠くもなる。肉体は失っているのに、だ』
肉体とは器だ。
存在を閉じ込めておくだけの殻にすぎない。暫定的な在り方にすぎない。
『お前の妹御は死んだのではない。囚われたのだ』
背を預けた重厚な壁越しに、向こうの部屋にいるロビンの体温が上昇しているのが分かる。
沈黙から温度が伝わってくる。

http://grimreaper.is-mine.net/

ロビンに宿る力の核は言わずもがな『怒り』。猛り狂う灼熱の焔。
対して。己れは――

◇・◇・◇

主君を守る盾。時に最強の矛に転じる守護者。
己れはその昔、騎士だった。
放浪の傭兵であったところ、ある国の王女に拾われたのだ。
美しく聡明で、強い人だった。闘いだけが取り柄の己れなど遠く及ばないほど。
それはもちろん単純な腕力の話ではない。
――心が。
『王とは貴族ではない。民を守る壁だ』
お世辞にも豊かとはいえない国情の下、民に尽くし、民と共に生きた。
隣国が仕掛けた戦闘行為に対しては平和的和解、つまり話し合いで応じた。
だが、民に変事ありし時は感情を露わにし、自ら戦場に出向いた。
己れに与えられた仕事は、そんな王女の護衛。
王女は時に、国政の一端を己れに任せてくる事もあった。なにやら世界を巡ってきた己れの知識だか頭脳を高く買ってくれていたらしい。
そのせいもあってか、己れは騎士でありながら賢者と呼ばれることもあった。
独り旅を続けていた己れの周りにできる人だかり。
なんだか、こそばゆい感情を抱いた事を覚えている。
己れには故郷がない。
正確に言えば、幼き頃に捨てられたので故郷を知らない。
そのことを話すと周囲は決まって「親に対して恨みは、寂しさは、憤りは」と問うてくるのだが、己れは肉親に対して感情を抱いたことがない。全くない。皆無といってもいい。
接した事のない人間に対し、抱く感情などなかろう。と言うと冷徹な奴だと思われるだろうが。
だが、実際そうなのだ。
己れには家族がない。故郷がない。

http://grimreaper.is-mine.net/

しかしそれゆえに王女が築き上げてきた輪の中にいることが新鮮だった。言い知れない温かさを感じた。安堵感があった。王女の家臣が傷つけられれば怒りが込み上げてきたし、鍛練中に街の娘たちが差し入れてくれる菓子がおいしいとも感じた。

もしも己れに故郷があるとすれば、それはきっと――

そういった感情を一番強く感じたのは、きっと、王女が死したあの時以外に考えられない。

垂れ込めた黒雲から雷光が降り注ぐ嵐の夜だった。

雷鳴と共に、突然、鎧纏いの女が現れた。

女は己れの命を狙ってやって来た。「アルヴィンスと言う名の男を出せ」と指名までしてきたから間違いない。

そうであったのに。

己れが出ていけばそれで事は済むはずであったのに。

騎士団は己れを守ろうと鎧纏いの女に立ち向かった。そして王女までもが壁となり、女と対峙したのだ。

しかし鎧纏いの女の強さたるや、まさに鬼神が如し。

強靭な戦士たちである騎士団が女の一撃で宙を舞い、叩きつけられ、女の眷属である有翼の獅子に屠られていった。

それでも騎士団は、王女は、立ち向かう事を止めない。

逃げろと叫んだ。大人しく己れを差し出せと喚いた。流れ者を庇う理由などこの国にはないと絶叫した。

それでも王女は己れに言ったのだ。――お前もすでに、私が守るべき民なのだ、と。

虚しくも、勝てる術などなかったというのに。

死の間際、王女は己れに黄土色の欠片を託した。

元は石版か何かだったのだろう。古の文字が刻まれており、終わりの文しか読めないため、全容を解明することはできない。

――か＊――総て　――終わりへと導く。

途切れ途切れの文章。

終わりへと導く。それが私の使命だった。後はお前に任せる。――王女は最後の力を振り絞り、それだけ言い残して息を引き取った。奇しくも安らかな笑みを浮かべながら。

http://grimreaper.is-mine.net/

結論から言えば、己れは死んだ。
王女と騎士団が全てを賭して守護してくれた命を自ら捨てた。
突撃という最も愚かな形で。
だが、王女から託された使命は、最期の命令だけには背くことはできない。
許されない。
ならばなぜ己れは間抜けに死んだ？　この世で最も返しがたい恩を受けた王女と騎士団の思いを踏みにじるような行動に及んだ？
後悔ばかりが募った。それはやがて自嘲になり、自己卑下となった。
そして果たせぬ約束と知りながらも果たさねばならないという止揚に辿り着いたころ、己れは目を覚ました。
世界の最下層。暗く閉ざされた地獄で。
後悔、というのが簡潔で正しいのだと思う。ただ、それだけではない。
重なり、折り合い、積み重なった後悔は――――固き約束となった。
『鋼の誓い』
感情というには程遠い表現だが、それが己れの力の核だ。

◇・◇・◇

「ちょっと待ってくれ。アルヴィンスはなぜニーナを探しているんだ？」
ふと。ロビンが問いかけてきた。
『そうだな……』
回答に困る。
なぜならこれは推測であり、未だ答に辿り着けていないただの予測なのだから。
己れは地獄にいた頃、厳冬の地で、王女から託された欠片と同一の材質で出来ている欠片を見つけた。その欠片にはやはり古の文字が刻まれており、断片的にだが読み取る事ができた。
――から　の望みを――最期へ――――女神が＊＊道標は　し。

http://grimreaper.is-mine.net/

このままでは読解はままならない。
が、端々の言葉から何が鍵になっているのか、という事ぐらいは予測する事ができる。
王女から引き継いだ使命、終わりへ導く事。
何を終わりへと導くのか……それも分からないままだが、地獄で見つけた欠片には『最期』という単語がある。
そして次の文章では『女神』と『道標』。
この二つの単語の間に入る言葉があるとすれば、それはもしかしたら『示す』ではないだろうか。
都合の良い解釈かもしれない。もしかすると違うかもしれない。
ただ、思考を止めるのは本当の意味で死を迎える事だ。精神の死。心の死。
答が欲しくば、抗い、求めなければならない。

『ロビン、もしも己れが妹御を助けられるかもしれないと言ったら、お前は信じるか？』

己れの言葉に対するロビンの反応は、肯定の頷きただ一つだけだった。
言葉はない。たかが三日間丸々話し続けただけの間柄。しかしロビンの目はどうだ。完全に己れを信じきっている。
希望的観測。
もしかしたら、かもしれない、だったら。
たとえその希望が蜘蛛の糸よりも細かろうとも、すがり、手繰り寄せ、登ろうとする。
それは明らかに無謀で馬鹿馬鹿しい愚行だが、動く者にしか見えない風景が。
抗い、求め続けた者にだけ訪れる答がある。
同じだ。
厳冬の地で欠片を見つけ、ヴァルハラまで登り詰めた己れと。
己れはその時、王女との出会いに似た、親しい者との間に生じる信頼関係というものを感じ取っていた。
『……己れの知っている全てを話そう』
どうやら本当に運が回ってきたらしい。
この地に訪れ、おそらく百余年の歳月は過ぎているはずだ。
向かいの赤の部屋も、右隣の青の部屋も空室のままだが、これ以上の好機は

http://grimreaper.is-mine.net/

ないように思える。

己れの使命を突き動かす時が、来た。

http://grimreaper.is-mine.net/

三、篝火

閉ざされた囚人の塔は脆く。
まるで決断を待ちわびていたかのように。
咎める者もいなければ、立ち塞ぐ者もおらず。
まるで誘(いざな)うかのように。
崖の上の囚人塔。
眼下に広がる野原は雄大で、悠久で。
しかし風は荒々しく、また、始まりを予期しているかのようだった。

「妹を救えるんだったら、死という代償すら温い」
銀の装甲。ロビン・ウォルタナは囚われた妹を助けるため、心中で滾る『怒り』の焔を更に炎上させる。

「最期への一歩。導き手は己れ一人で十分だ」
黒の外套。大剣携えるアルヴィンス・ガザは、今は亡き王女から譲り受けし導き手としての使命を、『鋼の誓い』を、再開する。

心拍数が上昇。
身体の奥底から何かが湧き上がるような感覚が。腹に留まっていたそれは更に膨れ上がり、弾けるように全身に広がった。
目下、崖の下に広がる野原に、鎧を纏った女たちの姿があった。野原を食い尽くす銀の軍勢。陽光を反射する彼女たちの眼光は鋭い。
対するロビンとアルヴィンスの戦力は――
かちゃり、と不意に金属音が小さく鳴る。
ロビンはちらりと後ろを確認し、すぐに前に向き直って言う。
「仲間なんて、いたのか？」
アルヴィンスは口角を吊り上げて応えた。
「百余年。大人しく沈黙していた訳ではないのでな」
二人の背後には、同じくここヴァルハラに捕らえられていた者たちの姿が。
雁首を揃えた男たちの数は百を超えている。それでも戦乙女たちの数に比べ

http://grimreaper.is-mine.net/

れば絶望的に少ないのだが、ロビンは心強さを覚えた。
「アルヴィンス」
「……？」
「――僕は、生きているのだろうか？」
「……どうだろうな。肉体の死が、お前が考えている死と直結するのならば、死んでいるのだろう。まあ、はっきりと断言はできないがな」
「……そうか」
「ただ、」

「心が死んでいないのなら思考を止めるな。心の死は完全なる無。お前が進みたい方へひたすらに駆け抜けろ。背中は己れが守る」

アルヴィンスの言葉にロビンは一瞬微笑んで、
「頼んだ」
言いながら駆け出す。
それが合図となり、アルヴィンスと男たちがロビンの後を追うように一斉に崖を下る。
同時、遠方で火を噴く大砲の轟音が、闘争の開幕を告げた。

http://grimreaper.is-mine.net/

四・五、灼熱

閃光が瞬いた直後、雷撃が駆け抜けた。
光の速度で荒れ狂うそれがブリュンヒルドの掌から連続して放たれ、ロビンに向かって殺到する。
地が爆ぜ。
光の尾が四散。
行き着く間もなく次の雷光が。
ロビンは走る。それら全てを躱し、躱して躱して潜り抜け、ただ前だけ見据えて疾走する。
銀の腕甲が切り裂かれ、肉が焼かれ、頬を雷光が掠めていった。
しかしそんな事など気にしている場合ではない。
この程度の傷が何だ。ニーナは、肢体を刻まれたニーナの痛みは、この程度では済まされない。
アルヴィンスの言う事が真実であれば、肉体の死は魂の別離。
つまり精神は生きているはずだ。元より、それが真実でなくてなんだと言う。そうでもなければ自分たちの存在証明すらできないのだから。
躱しきれない雷撃が胸当てを爆砕。衝撃と共に轟音が身体を震撼させる。ロビンは仰け反りながらも強引に体勢を立て直して走る。
この程度の痛み、妹が受けた痛みの比ではない。
自分の肉体はあの山で確かに死した。だが魂だけは自由だ。事実、何ものにも縛られていない。
しかし、ニーナはどうだ？
アルヴィンスの言う事が真実であれば、ニーナの魂はどこかに幽閉されている。
肉体を失い、計り知れない痛みを受けた後であるにも係らず、誰かに縛られている事になる。
それが憎いのもあるが、ただ、妹と同じ精神だけの存在となった自分だけが自由を得ている事が腹立たしい。業腹だ。
それ以前に、
なぜニーナでなければならなかった？
俄かには信じがたい『女神』を引き受けなければならない理由が分からない。

http://grimreaper.is-mine.net/

もしもこれが神などと言われる輩の気まぐれだとすれば、死によって覚醒するという手順も気まぐれによってもたらされたという事になる。
ロビンは神など信じていない。信じていないが、もし存在するとしたら――
――殺してやる……！
刹那、先よりも巨大な雷光がロビンに殺到した。
複数の雷鳴は甲高い悲鳴を重複させ、しかし光速で地を穿っていく。
僅かに触れただけでレガースが裂け、ガントレットが剥がされ、全身の装甲が朽ちていった。
ロビンは僅かに残った腕の白銀を自ら毟り取って叫ぶ。
「ブリュンヒルド！　聞こえているのなら答えろ！　なぜニーナなんだ⁉　なんでニーナでなければならなかった‼」
ロビンの声はほとんど雷鳴に掻き消されていた。
彼女との距離もまだ開きがある。
だが、届いていなくてもいい。例え今更なにを弁解されようとも、体内から溢れ出る火焔を止める事などできないのだから。
しかし、答えは返ってきた。
「あの娘がたまたま女神の特性を持って生まれていただけだ。他に理由は無い」
温度の無い言葉と同時、更に巨大化した雷光、いや、巨大な光の柱がロビンに迫る。
ブリュンヒルドの言葉に動きを停止させたロビンに光速の一撃を躱す術は既になく、強烈な光の束が炸裂――
「――ロビン！」
ズダァアアアン‼　と、空から降ってきた巨大な剣が大地に突き刺さり、雷撃を遮断。雷鳴とは全く別の轟音が鳴り響いた。
あまりの衝撃に地が震撼し、ロビンは巻き起こった衝撃波に飲まれて後方に吹き飛ばされる。
大地に突き刺さる巨剣。巨人が扱いそうなほど巨大なそれは、アルヴィンスが行使する四大『地』術の一つ。
ロビンに近付こうとするアルヴィンスだったが、別方向から飛んできた戦乙

女の攻撃に吹き飛ばされてしまった。
巨剣が淡い光となって消え失せる。
ロビンは身体を起こしながらブリュンヒルドの言葉を反芻する。それと共に、地に落ちた血液が発火、炎上を始めた。
『あの娘がたまたま女神の特性を持って生まれただけだ』
ならばニーナは、その偶然によって殺されたという事か？　もしかしたら回避できていたかもしれない死だったという事にはならないだろうか？
――……答えろ。
足元の焔が巨大化。ロビンの身体が紅蓮のそれに包まれる。
『他に理由は無い』
ならばニーナは、そんなどうでもいい理由で死んだというのか？
何か罰を受けたというわけでもなく、償いのためというわけでもなく、妹の事情も知らずに勝手に命を奪ったという事にならないだろうか？
――……答えろ！
ロビンの身体を包んでいた火焔が大炎上し、四方を巻き込んで巨大な炎陣と化した。
草という草を焼き、大地という大地を焦し、焔の巨大化はロビンの心に呼応するようにその速度を爆発的に加速させていく。

四大『火』術。それがロビンに宿った力だ。「――……………ルド」四大は術者の精神に依存する心の力である。ヴァルハラに戻りたいと強く思えば至れるように、大地を穿つ剣が欲しいと思えば具現できるように。「――………リ……ルド」感情を力に変換する。怒りの熱さだけロビンの焔は強大になる。まるで、感情そのものを具現化するように。「――――ブリュン、ヒルドォォオオオ!!!!」

瞬間、燃え盛る大火焔の中から焔を纏った怪鳥が飛び出した。燃え上る背にロビンを乗せ、波打つ焔の翼を振るい、大気を激震させながら滑るように空を駆ける。
対するブリュンヒルドも雷で巨大な騎馬を創りだし、騎乗。走り出していた。
彼我の距離は一瞬で無くなり、衝突。
弾ける雷と燃え上る焔が激しく喰らい合う。それとは別に術者同士も闘争に

http://grimreaper.is-mine.net/

及んでいた。
ロビンが焔の拳を振り抜けばブリュンヒルドが雷槍を突き刺す。
雷槍が身体を貫くたびに意識が飛びそうになった。だが、死ぬほどの痛みではない。苦しみでもない。
――倒れろ。
自分の拳がぶつかるたびに肉が焦げる臭いがした。あと少し。手を休めるな。
――倒れろ。
相手の得物は一つ。
光速の槍術を使うが手数はこちらの方が上。押し負ける道理は――無い！
その時だった。無意識にも相手の拍に合わせて繰り出した炎拳が雷槍を破壊。無防備となったブリュンヒルド。
絶叫しながら叩き出した焔の弾幕が彼女の全てを捉えた。
ロビンが纏った紅蓮はブリュンヒルドを焼き尽くし、振り抜いた大ぶりの一撃を最後に灰塵と化して消えていった。

『――それだけの思いがあれば、妹は救えるだろう。そして――』

消滅の間際、彼女の声が聞こえた。
奇しくもその声は、笑みを浮かべていると感じるくらい清々しいものだった。

http://grimreaper.is-mine.net/

五、そして、

がたがたとした音と揺れを感じ、ロビンは目を覚ました。
きょろきょろ周りを見渡してみると、ここが荷馬車の上だということが分かる。
ふう、と一息ついて積載してあった干し草に身体をうずめ――瞬転、がばりと起き上がってもう一度周囲の状況を確認する。
「……僕は」
確か、ブリュンヒルドと闘っていたはずなのだが……。
「起きたか」
不意に荷台の前方から声。
揺れる荷台を歩いて御者がいる方に行くと手綱を握ったアルヴィンスがいた。
「アルヴィンス、僕は」
「安心しろ。お前は確かに勝った」
だが、
「ニーナはヴァルハラに居ないらしい」
そう。アルヴィンスの言う通り、結局のところニーナはヴァルハラにいなかったのだ。
まさか……とロビンは変事を予測してしまったが、ニーナが（魂として）生きているというのは事実で、その事はブリュンヒルドが証言している。しかも、ニーナの肉体が死んだあの時に。

これより先に起こりうる『神々の黄昏』に勝利するためには女神の覚醒を促す必要がある。したがって、カサドレア国のニーナ姫の魂を拘束する。

ブリュンヒルドは最初から、殺害するとは言っていなかったのだ。
それにしても府に落ちない点がいくつかある。
前述した事もそうだが、最期の声。――それだけの思いがあれば、妹は救えるだろう。
これはどういう意味で放った言葉なのか。加えて彼女が最期の最期に残して言った言葉が一番理解に苦しむ。

http://grimreaper.is-mine.net/

そして『神々の黄昏』を止めてくれ。

『神々の黄昏』というのは世界を創り直すために行う戦争である。その戦争を神の側であるはずのブリュンヒルドが止めてくれと言い残して言った。

これについてアルヴィンスは、こう推測する。

「ブリュンヒルドは、もしかすると戦乙女の中では異質な存在だったのかもしれん。己れたちが収容されていた塔の見張りが異様に手薄だった事にも違和を感じたしな。普段の監視体制では脱獄はおろか、会話すらままならない。彼女は己れたちを意図的に開放したのではないだろうか」

その後、様々な事を考察してみたが、答は分からない。

彼女は死んでしまった。

なんだかやるせない気持ちになってしまうロビン。曲がりなりにも仇敵を倒したというのに。

ただ、その身に宿った力が未だ消滅しないということは、怒りの根源も消えてはいないという事になる。

四大（フォルス）とは思いの力。

その場所に至りたいと強く思えば至ることができ、地を穿つ大剣が欲しいと懇願すれば召喚することができる。

ロビンは『妹の居場所』と『本当の敵の居場所』に至りたいと強く念じた。

だが、ヴァルハラに至った時のように上手くはいかなかった。

ただし不発という感覚ではなく、誰かに効力を掻き消されているというニュアンスで。

至れないのではなく、妨害されている。

手綱を握るアルヴィンスが言う。

「それほどまでにこの道は険しいという事だ。妹御を助け出す道というのは」

もっともだと苦笑するロビン。

しかし絶望はしない。

強い思いは確かな力になる事を、知ったのだから――

〈了〉